

宗良親王と南朝の忠臣の

動向について

会員 井上秀男

1.美作国高坂氏と武田信玄からの書状

美作国英田郡英田町上山地区に大芦高原雲海という温泉施設があり、標高 400m 位で見晴らしの良い場所で、最近棚田の村おこしに若者達が集まって、活動し有名になっている。この上山地区には、上山神社があり、大足仲彦命が、大足（芦）の池を築いた威徳により祀る。中世まで大足宮、後に高津八幡、明治になって上山神社となる。

上山城主延原弾正忠景能が、太刀と鱧口を当神社に寄進している。高坂氏が数軒あって、この上山地区字淵尾の高坂孝氏（故人）宅に所蔵されている書状で、武田晴信（信玄）から高坂弾正忠昌信へ当てた書状です。

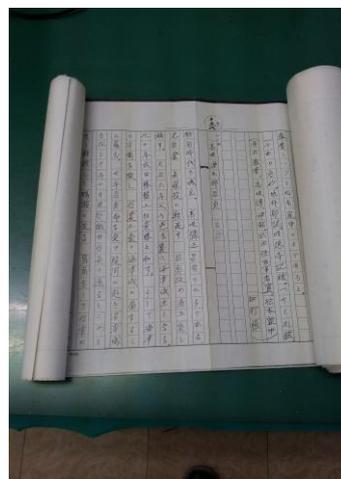


高坂孝氏宅に所蔵されている書状

この書状の内容は元龜 3 年（1572） 1 2 月 2 2 日、武田信玄と徳川家康が遠江の三方ヶ原で合戦をした後日の書状である。武田信玄の宿将高坂弾正忠昌信が、三方ヶ原合戦の時海津城にいて、上杉謙信の南下を防いだ功労にたいする感状の文書である。概要は「去る 22 日味方ヶ原、後詰め待ち入り軍算之事……加禄三百貫を恩賞として与える。依って忠勤の程を頼む」との内容で、書状の年月日が元龜 3 年甲 1 2 月 2 8 日と記され、合戦後 6 日後の書状です。高坂昌信は永禄 4 年（1561）

8 月の武田信玄と上杉謙信の川中島決戦以来、海津城の城将として、上杉氏の南下を防備する重要な役目をもって、武田信玄に仕えた智将である。

美作の高坂宅にこの書状が伝わっているのには、それなりの過程があった。高坂昌信には二人の男子がいて、長男の高坂源五郎昌澄は武田勝頼に仕えて、天正 3 年（1575） 5 月 2 1 日の信長・家康連合軍に大敗し、長篠の合戦で戦死する。二男は高坂源五郎昌武で同じく勝頼公に仕え、天正 1 0 年（1582） 3 月天目山の合戦で、信長家康連合軍にせめられ武田勝頼は自刃し、武田氏は滅亡する。しかし高坂源五郎昌武は難を逃れ、武田家の再興を願って天目山の合戦の後、毛利家を頼って中国地方に下って来る。しかしこの頃、羽柴秀吉が高松城の水攻めの最中で、どうすることも出来なくて、美作国英田郡河会庄上山に潜居して居住する。高坂源五郎昌武が英田郡上山での高坂氏祖であると由来書に書いてある。



高坂氏由来書(井上氏蔵)

武田晴信からの感状を信濃から中国地方に下る時に大切に所持していたものと思われる。天正 1 0 年（1582）から 5・6 年後の頃、高坂源五郎昌武の長子、高坂藤一郎昌秀は足守陣家に仕えていた時、辻秀正の家臣で藤森幸左衛門右次（すけつぐ）よりの文書があって、その文書は作州真島郡石井ヶ城主（現在の真

庭郡) 辻 (つじ) 新次郎秀正の領分の内、備中賀夜郡上高田村 (現在の岡山市足守地区) に二百石を宛がうというもので、足守陣家の高坂藤一郎 (昌秀) 殿と中島徳佐衛門殿、2名へ連名で書かれ、天正16年 (1588) 11月2日の年月日の記された文章である。

辻秀忠は真島郡石井ヶ城を築いて居城にしていた。この秀忠が作州の辻氏の祖である。美作後南朝の忠臣、原田佐秀の子孫は式部少輔に任ぜられ、越尾 (こしお) に居住し越尾を姓としたが、伊賀守平政の代に桓武 (かんむ) 平氏の末葉、稻荷山城主原田宗家 (そうけ=本家) 河内守忠平の女婿となり、菅家と平氏の末葉が婚姻で結ばれた。伊賀守平政の二男、伍郎二郎秀忠は祖父越尾持近 (もちちか) の家督を継いだ。永享11年 (1440) 公命により、真島郡鹿田郷に館を構えた植木惣十郎を討ち、地頭職となり居住地を鹿田郷辻に定めたので辻姓に改めた。

元弘の変には菅家七流の武士が後醍醐天皇を守り、次いで京都回復の勅命を拝して一族三百余騎が京都猪熊に戦い、辻家の祖である原田彦三郎佐秀は菅家七流の一族27人と共に討死したことは、太平記巻第八及び梅花余香18頁～21頁に記されている。

2. 宗良親王と南朝の忠臣香坂四郎高宗

宗良親王は後醍醐天皇の第八皇子で応長元年 (1311) に誕生された。生母は大納言為世の女、従三位為子である。20歳の時に妙法院へ御入室ありて一品の宮、天台座主法親王尊澄と称されていたが、延元2年 (1337) の春に還俗されて信濃宮宗良親王と称された。

父の後醍醐天皇は元弘元年 (1331) の元弘の変で再度、倒幕を企てるが失敗し、隠岐島に流される。その後隠岐から帰った天皇は建武政権を立て、独裁的な天皇親政を始めたが、3年で崩れ、建武3年 (1336) 12月後醍醐天皇は大和国、吉野に逃走して吉野の南朝と

京都の北朝とが分裂して南北朝時代になる。後醍醐天皇は吉野に居住して3年後の延元4年 (1339) 8月吉野の地で52歳の生涯を閉じられる。後継者は義良 (のりよし) 親王で第97代後村上天皇が即位され、改元して興国の年号に変わる。

宗良親王は南朝回復を願っておられた。興国5年 (1344) 信濃国伊那郡大河原上蔵 (わぞう) の地に、南朝の忠臣で美作守香坂四郎高宗の館 (やかた) に入られる。宗良親王33歳の時であった。大河原城は香坂四郎高宗の居城である。香坂氏は信州佐久郡の香坂の地名から姓としている。神坂とも称し、望月氏の始祖滋野 (しげの) から分流して、佐久地方に住していた氏族と文献にあり、香坂四郎高宗の父小太郎心覚は、建武3年 (1336) 正月公家方に応じて義兵を挙げたが、守護司小笠原経義、村上信貞、高梨経頼等の勢力に負け城を捨てて、伊那郡大河原に逃れたと「市河文書」に見える。香坂氏の紋章は十六弁の菊花紋を使用している。



井上氏所蔵の「信濃関伽流山」

長野県佐久郡三井村香坂西地にある関伽流山 (あかるさん) 明泉寺の過去帳には宗清入道覚法、小太郎入道心覚、美作守四郎高宗の名前はあるが、年代は不明な点があるとしている。香坂四郎高宗から数代の後に、香坂弾正筑前守宗重が更科郡の牧の島城主であった。その後武田信玄に仕えていたが、永禄4年

(1561)に川中島に陣した時、香坂宗重が上杉氏に通じたとの疑いをもって、信玄に誅せられた。しかし武田信玄は名家の香坂氏が断絶するのを憂いて、宗重の一女を海津城代春日昌信に娶らせて、その後を継がせて高坂弾正忠昌信と称した。高坂弾正忠昌信は武田信玄、勝頼と父子二代に仕えた武田氏の宿将である。

3.武田信玄と高坂弾正忠昌信

高坂昌信は初名を春日虎綱と名乗っていた。武士の出自ではなく石和（伊沢いさわ）の豪農で春日大隈（おおすみ）の子である。春日源五郎、春日弾正忠正忠、高坂弾正忠昌信と名を変えている。高坂昌信は天文11年（1542）の16歳の時に、信玄公の奥近習として館に出仕する。昌信は美童で信玄公の寵童（ちょうどう）であったと伝えられている。

高坂昌信は天文21年（1552）8月26才の時、信州攻略として、安曇（あずみ）郡小岩岳城（穂高町）の合戦で一番乗りして、この功勞によって侍大将に任じられ、春日弾正忠正忠と改名する。信玄公から信州小諸（こもろ）の城を預けられ城代として、佐久地方を守り甲越決戦の時には、前線基地となった海津城にて、北越の上杉氏の動向の押さえとして尽力した。

特に元龜3年（1573）12月22日の徳川家康、織田軍の連合軍と武田氏の合戦＝三方ヶ原の合戦で、昌信は海津城にて上杉謙信の南下する押さえとして海津城を守っていた。三方ヶ原の合戦で大敗した家康は浜松城に逃げ帰った。その時武田氏の宿将は一気に浜松城の家康を討取る意見を進言するが、高坂昌信唯一人「深追いは避けるが肝要」と信玄公に説得すると、その進言を受け入れたと伝えられている。三方ヶ原の合戦が終わってすぐ年号は天正元年になる。信玄公の体調も悪く、全軍甲府へ引きあげることになり、しかし途中の信州駒場（こまんば）長野県下伊那郡阿

智村で信玄は天正元年（1573）4月12日53才の生涯を閉じる。

その後天正3年（1575）5月信長、家康に攻められる長篠の合戦で武田勝頼は大敗する。天正4年（1576）4月信玄の死が公表、高坂弾正忠昌信が家臣を代表して葬儀を執行されたと伝えられている。信玄公死去の後、若い武田勝頼は老臣の意見も聞く意志もなく高坂昌信は、遠く離れた海津城で武田氏の行く末を案じていた天正6年（1578）5月11日海津城にて52才の生涯であった。その4年後の天正10年3月家康、信長の軍に天目山の合戦で敗北し、武田勝頼は自刃して、武田氏は滅亡する。高坂弾正忠昌信の墓地は海津城の近くで長野県松城町の明徳寺に埋葬されている。

4.新田義宗の挙兵と宗良親王

後村上天皇の正平7年（1352）2月新田義貞の三男義宗は、次兄義興と義貞の弟脇屋義助等と協議して、宗良親王を信濃より上野に迎え足利氏討伐の義兵を挙げ、滋野（しげの）一族、香坂四郎高宗、伴野十郎等が参戦したと太平記の中に見られ、義宗の兵と足利尊氏の軍と武蔵の小手指原で、正平2年2月28日決戦があつて宗良親王方は敗退する。

その後親王は、信濃、越後にと移られ3年を経て正平10年（1355）4月信濃に入れ諏訪一族、仁科、知久、栗田、三輪氏等の官方の諸氏を集め、小笠原長亮に対抗しての兵を起こした。宗良親王は諏訪上社の矢島正忠を大将として、親王自ら軍を率いて塩尻峠を越えて府中へ進撃し、敵軍は小笠原長亮を総大将と家臣の坂西、麻生、赤沢の諸氏と正平10年（1355）8月20日両軍は激突する。場所は東筑摩郡（長野）の桔梗ヶ原で合戦し宗良親王方の総大将矢島正忠は流れ矢にあたって倒れ、敗北する。宗良親王は天授6年（1380）頃信濃を出発し西上せられ、河内国山田庄に閑居され、その後遠江の井伊谷（い

いのや)にて元中2年(1385)8月10日73歳にての生涯を閉じられた。遠江国引佐郡井伊谷に埋葬されている。

今回の“きび考”の寄稿文を書くに当たり第2回歴研サロンが7月23日に開催され、雪吉政子さんの雪吉家の由来についてお話を聞かせてもらい、その中で後醍醐天皇の第八皇子の宗良親王の子供に尹良(ゆきよし)親王がいて、この尹良親王を祖に雪吉との姓になったと聞かされ、大変に興味を深く聞かせてもらった。

私は井上氏発祥の地が、信州上高井郡井上村で、色々と長野県関係の郷土史本を集めています。その中で「信濃関伽流山」(しなのあかるさん)という本の中に(前掲写真参照)宗良親王や南朝の忠臣として宗良親王に仕えた、香坂四郎高宗についての文面を思い出し、本を探し出して、再度目を通し今回の寄稿文の参考とさせてもらった次第です。関伽流山は山号で明泉寺という寺があり、場所は長野県佐久市(旧)三井村香坂西地にあります。

香坂四郎高宗は南朝の忠臣として宗良親王に仕え高坂弾正忠昌信の二男は、天目山の合戦の後、武田氏の再興を願って美作国へ来て、英田郡河合庄上山へ居住する。この河合庄には南朝の忠臣、渋谷一族が居住していた所でもある。信州から高坂氏が美作国へ南朝の子孫がいることを知って、来住したとも考えられます。苗字、姓氏、家紋、地名についても、それぞれの由来と歴史が秘められ、各家に伝わる伝承についても目を向ければ、色々なことを知ることができる。武田晴信(信玄)から高坂昌信へ宛てた一通の書状から、高坂氏の歴史と宗良親王に仕えた、南朝の忠臣として活躍した諸氏の動向について触れて見た次第です。不思議な縁の重なりに感動!!

参考文献 大日本地名辞典Z(吉田東伍著)

英田郡私考 日本城郭体系

信濃関伽流山 系図綱要 歴史読本